

私見 Thursday 創見

バンクシーというアーティストを「存じだろ」か。2018年に、少女と赤い風船を描いた作品が高額落札されるや、額に仕込まれたシニレッ

ターで突如裁断。瞬く間に世界中で報道され、話題に。日本では、バンクシー作品と題されるネズミの絵が発見されると、大手メディアやSNS

(交流サイト)で拡散、認知度が上がった。

しかし、創作活動の全貌や動機など、その真相が分かる者は依然少ない。「覆面アーティスト」と呼ばれ、謎に包まれた存在である。ゲリラ的な手法で社会を皮肉る作品をつくり、世間を騒がせる。批判や嘲笑の対象は、警察、王室、軍事国家、商業主義など社会的権威や現代社会の負の部分である。

世界で300万人を動員し、日本でも開催された「バンクシー展 天才か反逆者か」の展覧会が記憶に新しい。2020年6月、ある方から「海外から美術作品を購入したが、作品の取り扱いについて相談に乗ってほしい」と連絡がきた。なんと、あのバンクシーの『Banksquiat(バンクスキア)』という作品だ

社会問題に鋭いまなざし

という。バスキアへのオマージュ作品で、トレードマークの王冠になっているゴンドラの観覧車と、その観覧車に乗ろうと列をなす人々を描いたシルクスクリーン作品である。

2019年10月、バンクシジュ作品で、トレードマークの王冠になっているゴンドラの観覧車と、その観覧車に乗ろうと列をなす人々を描いたシルクスクリーン作品である。2019年10月、バンクシ

バンクシーとバスキア



佐貫 巧

八戸学院大
短期大学部准教授

さぬき・たくみ
1982年、静岡市生まれ。学多摩美大卒、東京芸大大大学院修了。2013年から現職。14年より八戸圏域で現代芸術教室「アートイズ」を主宰し、アートを通して世の中をつくる活動をしている。おいらせ町在住。

で、世界中から多くの人が作品(限定300枚・サイン入り)の抽選販売に参加した。この作品は、販売屋の容易な販売を防ぐため、購入後2年間作品の証明書であるCOAを発行しないという条件で販売されたものである。2020年8月27日に行われたイギリスのオークションで、「Banksquiat」が出品された。落札額は11万8750ポンド、日本円にして約1662万円。COAなしでの販売にも関わらず、たった11カ月で価格が237.5倍に上昇した。アート作品は価格だけが取り沙汰されることが少なくないが、アーティストがどんな

思いで制作したのか、社会に対して何を言及しているのかが大事である。バンクシーのルーツであるバスキアは、自身の表現を通して人種や格差の問題などに対峙した。アンディ・ウォーホルやキース・ヘリングらとの交流でも知られるバスキアとは対照的に、その素性はいまだ謎に包まれるバンクシーもまた、社会問題に鋭いまなざしを向け、ブラックユーモアと痛烈な批評性を含む作品を世界各地に出現させている。人種差別、権力の乱用、格差など、両者が作品を通して言及してきた問題は共通点が多い。それはバスキアの死から30年以上たった今も、社会の抱える課題は変わらず山積している、ということなのかもしれない。前出のバンクシーの作品を購入された方は、「申し込みには50 wordsのエッセイが必須だった。当時は個人的につらいことがあった時で、娘たちを思っシンプルな気持ちで書いたものを送信して当選した。絵画を通じて救われているよな、守られているような気持ちになるんです」とおっしゃっていたのが、とても印象的だった。バンクシーは「芸術テロリスト」とも呼ばれる、奇抜な行動の印象が強いが、巧妙な伝え方とタイミングで世界を変えていく、博愛に満ちたアーティストである。喜びと畏怖の入り交じる気持ちと共に、芸術の力に感動した瞬間に偶然にも立ち会うことができた。22年、COAが発行された。「2年前の気持ちと対峙しなさい」というバンクシーからの問いかけなのかもしれない。